
棺のクロエ1.5 花嫁強奪

義忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棺のクロエ 1・5 花嫁強奪

【Nコード】

N1130Z

【作者名】

義忠

【あらすじ】

<帝国>の隣国<王国>の王女フェリアの結婚式が華やかに催されんとしたその直前、ヒュー・タム少佐は会場から彼女を連れ去った。<王国>親衛隊による王女暗殺を阻止するためと告げる少佐だったが、雪の山岳地帯を越えて<帝国>領へと脱出せんとする二人に追手が迫る 雪の山岳地帯を舞台に繰り広げられる機械幻想の

外伝！

マシーナレイ・ファンタジー

かれこれもう百年以上も歴代の王家の花嫁を見守り続けてきたという、壮麗な造りの鏡台に、憂いを帯びた女の貌かおが映っていた。

帝都の最新モードを基調に民族調に編み上げられたレースを組み合わせた、真っ白なウェディングドレス。きらびやかな宝石をちりばめた由緒正しきティアラ。普段は短めの亜麻色の髪は、付け毛ウイックで肩から下まで伸ばされ、絶妙な膨らみを帯びて腰まで流れる。そして、王都でもいちにを競うアーティストのメイク。いずれも、王家の娘の婚禮にはまずもって十分な気品と豪華さ。

女として生まれて、一世一代の晴れの日を迎えたこの日に、鏡の中の彼女に何を憂うことがあるのか。フェリアはどこかまるで他人事のように、鏡に向かってそんなことを考えていた。

「花嫁マリッジ・ベールの憂鬱」？

ああ、そうかもしれない。この土壇場になって、底知れぬバカバカしさに捉われているこの感情をそう呼ぶのなら。もっとも、世のすべての花嫁がこんな虚無感を抱いて嫁ぐのだとも思わないけれど。一〇代でスキーと乗馬の国際大会の選手に選ばれ、その後も帝国への留学中には帝国皇族と浮名を流し、帰国後もスポーツや芸術の積極的な後援者として振る舞って、自身も登山やドライブなどを好む「開かれた王室」の象徴たる行動派王女。そうした国民に流布する華やかな自分のパブリック・イメージの裏側で、大樹を内側から侵食するウロのように、ぼつかりと開いた空洞が広がってすべてを呑み込もうとしている。

花婿が気に入らない、というのではない。むしろそこはどうでもいい。王室官房の役人達が、数年掛かりで見つけ出してきた相手に文句があるわけではないのだ。「王室を軸とする国家和合」なる崇高な企画コンセプトに則って、膨大な量の報告書と企画書と比較分析表の洪水に、無限に続くかに思えた審議会と非公式の根回しの果

てに浮かび上つてきた花婿候補に、たとえ当事者といえど異を唱えられるわけもない。

無論、「王女様のワガママ」で面子を潰される政財官学の錚々たる顔触れなぞどうでもいいが、しかしそうまでして通したい我があるわけでもない。

そうやってただ流されるままに状況に流されて、いよいよ式を迎えるこの段になって、己の中身がかくもからつぽの伽藍堂だったのだといよいよ気付かされた自分が今ここにいる。

いや、ずいぶんと酷い話だと、我ながら思う。こんな抜け殻のような女を娶る花婿に、我がことながら同情を禁じ得ない　まあ、そんなことを考えている時点で、既に他人事に近いのだが。

得体の知れない不快感が沸き起こってくる　それが誰の、何に対する不快感なのか自分でもよく判らない。

「……『高貴なる者の義務』、だつたかしら……」

今はここにはいない男の言葉を呟き、ようやく口許を小さく綻ばせることができた。まったく、便利な言葉だわ。いろいろなものに蓋をすることができる。　あの時、彼が口にした時には、もう少しましなニュアンスで使われていた言葉だったような気もするけれど。でも、それとても、もうよく思い出せない。どうしても焦点の合わない映写幕を眺めるように、何もかもが遠く、遠く、霞の彼方に在り続けている。

そこへ目を凝らすでもなく、手を伸ばすでもなく、立ち去ることもできず、嫁ぐ自分にも現実感を欠いたまま、フェリアは鏡の向こうの自分をただぼんやりと眺め続けていた。

そこへ不意にノックの音が聴こえ、我に還った。

式典の関係者かしら。時間はまだあるはずだけど。

もういちどノック音　やむなく、鏡台の前から立ち上がり、ドアへと向かう。メイクが終わってから、しばらく独りになりたい、と半ば強引に人払いをしてみたために、この控え室にはフェリアひとりしかない。

分厚いドアを開けると、細身の眼鏡を掛けた礼服姿の儀仗兵が立っていた。

長身の儀仗兵は白手袋を嵌めた右手で帽子のつばをわずかにずらし、眼鏡のグラス越しに細めた黒い瞳でこちらを見下ろしている。端正ではあるものの、どこか岩塊から荒っぽく削り出されたような凄みの貌立ち^{かお}。王室への敬意のあらわれというにはあまりにも不遜窮まる形に口許がわずかに歪む。その微笑と、眼鏡の下から槍の穂先のような鋭さで投げ掛けられる眼光とのギャップに奇妙な威圧感を感じて、フェリアは小さく息を呑みこんだ。

儀仗兵は短く訊ねた。

「フェリア王女殿下？」

「……何事ですか……？」

王国の人間なら見間違えるはずもない自分の顔を見て、何故、あえて名を訊く？ 疑念を口にするより先に、儀仗兵はふてぶてしく破顔する。

「結構 急いでください。ここを出ます」

「……？ あなた、何を言ってる」

訊き返しながら、ふと儀仗兵の足許へ視線を落とす。そこにできた血溜まりの中に、濡れた男の腕が転がっていることに気付いて、小さく悲鳴を上げる。

「！？」

とつさにドアを閉めようとしたそこへ、男は軍刀^{サーベル}の柄を突き出してきた。ドアの隙間にねじ込んだその柄を使ってそのまま強引にドアをこじ開けると、室内に押し入ってくる。

「失礼。時間がありません。命が惜しければ、言うとおりにしてください」

凄みのある笑みで告げる男の言葉に、フェリアは頷くしかなかった。

帝国 北方外縁に連なる諸国の中でも、比較的長い歴史と大きな国力を有する 王国 。その 王都 にあつて、鎮護国家の要として、王宮と向かい合うように聳える尖塔で人々に親しまれている大聖堂の一室 今日この婚礼式典では花嫁の控えの間とされたその部屋はもぬけの殻と化し、対照的にその前の廊下と壁面には大量の血がぶち撒けられて、床の上には幾つかの屍体が転がっている。王室親衛隊長であるクタル・コープ少将は、冷やかにその惨状を眺めた。

射殺された警備兵の屍体が二、消音器付きの短機関銃を手にした儀仗兵の屍体が二 こちらはいずれも一太刀で斬殺されている。将軍は足許の屍体から短機関銃を拾い上げ、装捍を半ばまで引いて薬室に銃弾が装填されていることを確認した。

「将軍！」

派手なフラッシュを焚いて現場撮影を行っている部下に場所を譲った少将の禿頭の後頭部へ、背後から張りのあるバリトンの大声で呼び掛けられた。

振り返れば、秘書を引き連れた白いタキシード姿の大柄な壮年の男がつかつかと駆け寄ってくる。

「私の花嫁はどこだ!？」

「奪われました」

「何だと!？」

醒めきつた表情で返す少将の言葉に、花婿であるはずのエラン・マキナスは驚愕で貌を歪めた。若手ながらも市民議会の実力派議員として知られ、将来の宰相候補とも目されてもいるエラン・マキナスは、獅子にも喩えられるその貌を少将に寄せて小さく囁いた。

「まだ生きてるのか!？」

「帝国 の工作員に薄皮一枚で先手を取られました」

「帝国 に知られてるだど？」

「想定範囲内です。若干のシナリオ変更で充分に対処可能でしょう」

淡々と応える少将に、エラン・マキナスは念を押すように訊いた。
「大丈夫なんだな？」

「無論です」

「……後は、私が花嫁を奪われた間抜けな花婿の屈辱に耐えればいい、ということか」

「その問題も、この場で片づけましょう」

「何？」

振り返る胸元に少将は短機関銃S.M.Gの銃弾を叩き込んだ。

エラン・マキナスの大柄な体躯が、悲鳴も上げずにその場で床にひっくり返る。表情ひとつ変えず、少将はその頭部へ続けてとどめの銃撃を加えた。

それを見ても、周囲の兵士たちに動揺はない。すべて既定の出来事のように、誰も姿勢を崩さない。

唯一の例外として、ひいつ、と悲鳴を上げた秘書が、踵を返して走り出す。

と、その横を軍用コートを羽織った長い銀髪の士官がすれ違う。

その刹那、コートの裾がわずかに翻り、腰の軍刀サーベルから糸のような銀光が空間を縫い走る。次の瞬間、秘書は袈裟掛けに斬り捨てられ、周囲の壁面に大量の血を撒き散らしながら床へと転がり崩れた。

それを振り向きもせずに見し、男は少将の前で立ち留って敬礼する。

「遅いぞ。シラン大尉」

「申し訳ありません、將軍」

低い掠れ声で応える土気色の肌の大尉に、少将は床の屍体へ顎をしゃくる。大尉は無言で腰を落とすと、斬殺された儀仗兵の鋭利な傷口へ指を添えた。

「例の片腕機人の 帝国 軍人だな？」

「間違いありません」

頷く大尉へ、少将は吐き捨てるように訊ねた。

「貴官から『死んだ』と報告を受けたのは、つい昨夜の話だぞ」

「遺体は見つかってません。どうやら生きていたようですね」

悪びれもせずに大尉が視線を返す。幽鬼のような落ち窪んだその両目に、少将は小さく眉を顰めただけでそれ以上咎めず、告げた。

「奴は王女を連れて逃げた。おそらく国境を越え、帝国 軍部隊と合流するつもりだろう 貴官ならどう動く？」

「クトラ口からキ工山脈を越えます」

「女連れの足で冬の雪山越え、か？」

「姫様単独では無理です。しかし、経験者がそばについて、無理をさせれば可能でしょう」

「……………」

少将はぎよろりとした大きな眼で大尉を見据えた。

「王女の身柄を 帝国 に押さえられて、連中にいいように使われるわけにはいかん。少なくとも、生きていると知れただけでも、様子見を気取る軍部の動揺を招きかねん」

「承知しています」

「よし。国境警備隊にいる同志に手配して、手だれの部隊を廻してやる。追って、必ず仕留めてこい ふたりとも、な」

「御意」

頷く大尉の双眸の奥で、冷たい光が炎のように揺らめいた。

1 (後書き)

『棺のクロエ』外伝です。

今回のお話は既に発表済みの『棺のクロエ1&2』のちょうど間の時期の出来事で、少佐主役の番外編。「棺」もどつちのクロエも出てきません。二人のクロエ達の冒険とは別に、こんな世界もあるんですよ、ということ。

今回は事件発生の第1話に、事件の背景を一気に語る第2話まで同時に掲載します。

引き続き、第2話をお楽しみください。

「もう一度、先ほどのニュースを繰り返します。」

先ほど午前一時過ぎ、王都の大聖堂にて開催されようとしておりましたフェリア王女殿下とエラン・マキナス氏の婚礼会場を何者かが襲撃し、新郎新婦のおふたりを殺害して逃走しました。

また国王陛下、皇后陛下、皇太子殿下を始めとした王族の皆様方を始めとした列席者は、会場を警護する親衛隊によって保護され、全員、無事に現地に留まっているとのことでした。

これを受けて首都民警本部と親衛隊本営は、共同で王都全域の戒厳令の布告を宣言。市民の一時外出禁止を宣言しました。

市民の皆様は無用の外出を避け、外出禁止令が解除されるまでくれぐれもご自宅から出ないように。」

「おやおや、死んだことにされてますよ、貴女」

「……………」

「それと、よく聞くといろいろおかしな放送ですね。お国では、戒厳令って、首相や国王以外でも勝手に布告していいんですか？」

「……………少し黙っててくださいませんか」

フェリアは助手席から、運転席でステアリングを握る眼鏡の男を睨みつけた。つい先ほどまで儀仗兵姿で軍刀をぶら下げていた男は、洒落た高級スーツ姿に着替え、何事もなかったかのような表情でスポーツカーの運転席に納まっている。ポマードできれいに撫でつけた総髪頭オールバックに細身の眼鏡。それが度の入ってない伊達眼鏡であることに気付いたのは、車に乗せられてからだ。とが相俟って、ぱつと見、売り出し中の新興財閥の青年実業家といった風情の格好だった。

一方のフェリアもウェディングドレスから、スポーティーなパンツルックに着替えさせられている。大聖堂内の別室に連れ込まれ、これに着替えるように押しつけられたのだ。付け毛ウィッグやアクセサリー

の類はその場で捨てさせられた。さすがにメイクを落とす暇はなく、代わりに大きめの鳥打帽キャスケットとサングラスを渡された。これで誤魔化せ、ということらしい。

いやらしいことにサイズも趣味もぴったりだったが、文句を言う間も与えられなかった。そのまま事件発覚で騒然となる大聖堂をぬけぬけと正面入口から出て、VIP用駐車場に停めてあったこの王国 製高級スポーツカーに乗り込むと、駐車場を封鎖していた親衛隊兵士を親衛隊長コープ少将の署名の入った命令書 どうせ、偽物に違いないのだが と舌先三寸で丸めこんで突破。事態に気付いて慌てて集まってきた兵士達が発砲するのを尻目に、フェリアを連れてあっさりと現場からの離脱に成功してしまった。

まるで魔術師のような というより、質たちの悪い詐欺師のような鮮やかな手際だった。

その後、こうして郊外へと繋がる幹線道路上をアクセルべた踏みで疾走しているという次第なのだった。

結局、この男は何者なのか。

帝国 軍人で、自分を救いに来たと言口にしていたような気もするが、警備兵達の屍体を見て以来、思考停止状態で言われるままにここまで来てしまった。

いや、もしかして と言うか、かなりの確率で、自分はただ単にこの男に誘拐されただけなのでは……？

轟々と音を立てて血の気が引いてゆくフェリアの横で、男は何が面白いのか口許を緩ませて言った。

「いや、失礼。とりあえずこの分だとラジオ局は押さえられたようですね。さっきからの局でも同じ内容だ」

「……クーデター……？」

男が頷く いや、そんなに軽々しく頷かれても困るのだが。

「誰が、何で いいえ、それより貴方、何者なの？」

「……さっき説明しませんでしたか？」

「聞いてません」

即答する。聞いたかもしれないが、それどころではなかった。記憶にはまったく残っていない。従って、フェリアとしてはウソは言っていない。

男は苦笑し、改めて自己紹介を始めた。

「私は 帝国 陸軍のヒュー・タム少佐です」

「 帝国 のスパイ？」

「一応、正式に武官としての届けは出しておりますが」

「判るわけないでしょ。 帝国 おたく の大使館には1、000人以上勤めてるのよ」

「まあ、どうせ大使館にはろくに顔を出してませんから」

……そこはかとなく、物言いが勘に障るのは何故だろう？

「それで、 帝国 の軍人が何で私を誘拐するんですか？」

「誘拐じゃない、という話も二度目ですけどね」

「聞いてません」

再度、即答する。

「なるほど」少佐は肩をすくめて頷いた。

「ならば改めてご説明します。

私達 帝国 の情報網が、結婚式典会場での貴女の殺害と、参列客の拘束、それと並行して 王都 に戒厳令を布告して国権を篡奪せんとする勢力の存在を察知しました」

「……誰が、そんなことを？」

蒼褪めた表情で訊ねるフェリアに、少佐はあっさりと首謀者の名を口にした。

「王室親衛隊長クタル・コープ少将」

「バカな つ！？」

「後は、内務省と国境警備隊の一部 軍は 帝国 留学組に枢要を押さえられていますから、避けたようですね」

「何で、そんなことが判るんです!？」

「仕掛けた本人から直接話を聞きましたから」

しれっと少佐が言い放つ。

「??？」

「同盟ディスタビリゼイズ・オフィサーの不安定化工作要員がお国に潜り込んでいたんですよ。

そいつが 王国 国内の反 帝国 勢力を煽って事に及ばせた」

「反 帝国 勢力……って、そんなものこの国にはありません！」

「これまではね。ただし、気分として反 帝国 の空気はあった。

この前の戦争ではお国からも数数十万の出兵をして、未帰還兵も数万人規模で出ている。身近に未帰還兵や傷病兵を出した国民の中には、潜在的な 帝国 への反感を抱いている者も少なくない」

そういえば、コープ少将の三人の息子はいずれも 帝国 と 同盟 の戦争に出征し、戦死している。その心労からか戦後すぐに妻も亡くしている。フェリアもその葬儀に参加して、外遊中だった父王の弔文を直接伝える役目を果たしている。

「待って。だからって、それがこんな叛乱騒ぎに直結するなんて、話が短絡過ぎます。我が国の経済が 帝国 との密接な関係で成りたっていることくらい、子供だって知ってるわ」

帝国 本土の北方から西方辺境領に至るまで、長大な地域に横たわるキエ山脈 その山岳地帯に分断されて存在する群小の北方諸国家群。その中でも盟主的な位置づけで存在する 王国 は、北方諸国群各地からの農産物や木材、鉱物資源などの一次産品を使って、食品や木工家具などの加工品、鉄鋼、アルミなどの工業資材、さらには時計から自動車、航空機にまで至る多種多様な工業製品を造り、帝国 圏へ輸出して経済を発展させてきた。

それを可能としたのは、ひとつは複雑を極める北方諸国間の利害関係ハートランドを精妙に調整し、中原の歴代政権と彼等とを政治・経済・軍事の各側面で結びつけてきた優れた外交能力。それと、中原で政変ハートランドが起きるたびに乱を嫌って逃げ出した学者や技術者を多く受け入れてきたことよって、高度な工業技術産業を育くんできていたことなどが挙げられる。

実際に先の大戦では、近代戦で生じた巨大な資材消費に加え、総力戦規模の大規模動員によって生じた 帝国 の著しい生産力不足

を 王国 は充分以上に補つてのけた。トイレットペーパーのような生活消費財から、自動拳銃や小銃のような小火器、戦車、大砲、航空機や飛行艦用エンジン、果ては海もない内陸国にも関わらず潜水艦用の機関まで輸出し、 帝国 の戦争を側面から支えきつたのである。

勿論、戦後の復興にも 王国 からの資材産品や工業機械は欠かせない。こうして少佐がステアリングを握る 王国 製スポーツカーも、順調に回復しつつある 帝国 経済の旺盛な個人需要を満たすため、増産に増産を重ねている。

もつとも、逆に言えば 王国 の旺盛な生産力を受け留められる市場は、 帝国 以外にない。

事実、戦争を通じて 王国 は膨大な貿易黒字を溜め込んだが、国内の産業力基盤の整備や製造業の設備投資に使われた以外は、そのほとんどは戦時外債などを通じて 帝国 本土に還流している。

帝国 との力関係で強いられた面もあるが、 王国 国内では他に使い道がなかったからという方が理由としては大きい。人口三、〇〇〇万強の 王国 に、たとえ周辺の北方諸国を数に入れても人口も市場規模もたかが知れており、個人の消費需要にも限界がある。そこに無理やり資金を流し込んででも実体の伴わないバブル経済となつてしまい、長い目で見れば市場や人心を傷めつける結果にしかない。

かと言って、規模として 帝国 圏に匹敵する 同盟 圏は、市場として遠すぎた。内陸の 王国 から商品を輸出するには 帝国 圏を通過するしかない。またビジネス上のトラブルが発生しても 同盟 圏での 王国 単独での影響力など知れたものだから、どうしても商売は不利にならざる得ない。 王国 が 帝国 経済に影響されない独自の商圈を確立したくても、一朝一夕で出来る話ではないのだ。

つまり 王国 の経済は、完全に 帝国 経済に組み込まれる形で成立しているのだ。それは国民の誰もが身に染みて理解する厳然

たる事実だ。

なればこそ、 帝国 からの出兵要請にさほどの反発もなく応え、戦後も多少の不満はあれ明確な反 帝国 運動のようなものもなかった。

しかし

「だからと言って、傷つかなかったわけじゃない」

「……………」

少佐の指摘に、フェリアは小さく眉を顰めた。細身のナイフをそっと刺し込まれたような感覚を胸に覚える。

その痛みの意味から目を逸らすように、フェリアは視線を車外へと向けた。道はいつしか川幅の広い河川沿いの道に入っている。河の兩岸は氷河に削られた切り立った崖からなり、そこにうねうねと曲がりくねった二車線道路が張り付いていた。戒厳令の影響か、行き交う車もほとんどなく、遠くの川面を喫水線の低い運河船カナルクルーザーが浮かんでいるのみだ。法定速度を完璧に無視して突っ走るスポーツカーを見咎める者はいない。

空は低く灰色の雲が立ち込め、いつ雪に変わってもおかしくない雰囲気だった。この時期の 王国 の天候としては珍しくもない天気だったが、だからといって慰めを見出せる空模様とは言い難い。

フェリアの動揺を知ってか知らずか、少佐は告げた。

「だからこそ、感情の持って行き場が見つからず、鬱屈していた。そこを付けこまれたんですよ」

「……酷い言い方をするのね」

「世の中は善人ばかりではありませんから」

フェリアは苦い吐息を洩らしてから、少佐の横顔を睨みつけた。

「それで、クーデターで親 同盟 政権でも作るうっていうんですか？」

「まさか」少佐は苦笑して応えた。

「ただの不安定化工作ですよ」
ディスタビライズ・オペレーション

「不安定化……何ですって？」
ディスタビライズ

「不安定化工作 叛乱や暴動、社会不安につながるありとあらゆる人為的工作、そのすべてです」

フェリアは眉間を押さえつつ反論した。

「待ちなさい。 帝国 と 同盟 はつい先日も停戦条約延長で合意したばかりだし、通商条約復活の協議も進んでいると聞いています。我が国とも、 帝国 外務当局との協調下で、水面下での接触も始まっているわ。こんなタイミングで、そんな何もかも台なしにしかない真似」

「ああ、そこはちょっと違うんですよ。」

同盟 政府は確かに 帝国 との和平を望んでいる。機械化率が高く正面装備に金の掛かる対 帝国 の兵力を削減し、国内の経済復興や南方のエネルギー資源確保に資金や人材を振り向けたいと考えている。そこに嘘はなくて、それが外交面でのここ最近の平和攻勢につながっている」

「だったら」

「けれど、それだけでは不充分と考えてしまうのが、 同盟^{かれら} の外交や軍事の考え方でしてね」

「……………？」

「敵との緊張関係を緩めたければ、敵の意識を他に向けさせればいい そう考えたがる悪い癖がある。だから 同盟 との付き合いは平和な時ほど油断がならないんです。」

で、現実問題として、 王国 を始めとした北方諸国に不安定化されたら、対 同盟 戦略どころの騒ぎではない。そこへ 同盟 から兵力削減の提案をされれば、こちらは乗らざる得なくなる」

「そんなくだらないことで……………人が何人も死んでるのよ……………」

絶句するフェリアに、少佐はあっさりと言いつつ放った。

「人が死ぬ理由なんて、大概、こんなものですよ」

「……………」

何だ、この男……………？

ふてぶてしい微笑を浮かべた男から、不意に冷たく乾ききった空

気を感じて息を呑んだ。フェリアがこれまで出会って来た軍人達とはどこか違う、暗闇の底を覗きこむような虚無感。何をどうすれば、こんな人間が出来るのだろうか……？

そんな疑念がよぎったものの、フェリアは別のことを訊ねた。

「それで、その同盟の作業員は……？」

「帰りましたよ。本国に」

「な……っ！？ 何で逃がしたんですか？」

「そういうものだからです。帝国も同盟でいろいろやりますからね。あのレベルの作業員には互いに手を出さないことになってる」

「そんな」

「ついでに付け加えると、全部の仕込みが終わった時点で、それはすべての情報を手にして投降してきた。無事に本国に帰国することを条件にね。何故だか判りますか？」

「判りません、そんなこと」

「彼の計画には、最終段階での帝国軍の介入が折り込まれていたので、

貴女の指摘するように軍事的、経済的に王国はいくら足掻こうと帝国のくびきから逃れようがない。だが、たとえば結果が同じでも、直接的な軍事制圧が行われてしまえば、王国市民の帝国への遺恨は数十年単位で後をひく」

「軍事制圧！？」フェリアの背筋を冷たい電流が走り抜ける。

「何でいきなり、そこまで話がエスカレートするんです？ コープ

少将がどんな政権を打ち立てようと、帝国と王国の力関係は明白なのよ。ならば時間を掛けて待てば、いずれ」

「ああ、問題は、その時間があまりないこととして」

「……………」

「既に報道で流れている話ですから隠し立てはしませんが、帝国の陸軍参謀総長の容体があまり芳しくない」

「その話なら、聞いています」

フェリアは頷いた。俗世の権勢のほとんどを軍隊、とりわけ兵数の多い陸軍によって支配されている 帝国 では、陸軍参謀総長は実質的な国家元首と言っている。

「死なない人間はいませんから、それ自体はいつか来る話が今来たというだけに過ぎない。しかし、問題はこの期に及んで後継者が決まっていないことでしてね」

「な……え!？」

さらりと口にされた少佐の台詞に、フェリアは慄然とした。

帝国 陸軍参謀総長の入院は周知の事実でも、後継者の指名もできないほど重篤とは聞いていない。つまり 帝国 の権力中枢は今現在、真空状態だということでもある とんでもない国家機密の漏洩だ。

そんなものを、何故、こんな場所で自分に いや、そもそも事実なのか？ 事実だとして、目の前のこの男は 帝国 のどこの誰の意思決定でここに……ああ、確かに政治中枢の意思決定などなくとも、出先機関が情性と脊髄反射で謀略のひとつやふたつやりかねない国ではあるが。

しかし、真実恐ろしいのは、この状況で 王国 はクーデター紛いの状況に突入してしまった、ということだ。

権力中枢の統制を欠いた 帝国 の関係当局が、この状況でどう動くか判らないというだけではない。下手をすると、 帝国 内部の権力抗争に巻き込まれて、国土を蹂躪じゅうりゅうされかねない いや、既にしてこの状況自体、 帝国 内部で起こっているこの地殻変動の余波ではないとも言いきれない。

大国に隣接する小国の民の本能的な感性として、事態の深刻さをまざまざと理解してフェリアは蒼褪めた。

加えて、それを「今」、「ここで」、「自分相手に」語る、この男の意図は何なのか？

そもそも、目の前のこの男が本当に 帝国 の軍人である保証もない つまり今の自分を取り囲んでいるものに、何ひとつ確かな

ものはないのだ。

「……………」

サイドシートで黙り込むフェリアをよそに、少佐の説明は続く。

「同盟」のその工作人員の計算違いは、我が帝国の権力中枢が既にそこまで不安定化していることに理解が至らなかったことです。まあ、ウチの参謀総長の容体はトップシークレットなので無理もありませんが。

そんなわけで、今の帝国に北方諸国の不安定化を許す余地はありません。事を知って、帝国国内では事態を急いで解決しようとする政治的なベクトルが既に動き出しています。早目に手を打って、状況の悪化を防ぐ必要があった」

「…………防げてないじゃないですか」

「ごもつとも」少佐は苦笑して頷いた。

「ですが、これでもぎりぎりのところで最悪の事態を避けることに成功してるんです。

連中の計画通りなら、今頃貴女は既に死んでいて、ほどなく国境の向こうで待機している帝国ウチの陸軍空挺部隊パラトルーパーが王都上空から舞い降り、国境線を山岳歩兵師団が浸透突破を図って、彼等に確保された回廊に戦車師団が突入するところでした」

少佐の説明は妙に具体的で、実際の軍事作戦の存在をフェリアに確信させた。

「…………まるで『戦争』じゃないですか！」

「『戦争』ですよ」少佐は頷いた。

「だから、それを避けるために、貴女を救い出したんです」

「…………大まかな状況は判りました。でも、まだ判らないことがふたつあります」

「ひとつは貴女の命が狙われたこと」

「ええ。狙われたのは王族全員ではなくて、『私だけ』なんですな

？」

「そうです。あえて貴女の死亡報道だけが流れたということは、おそらく他の王族の方々の身柄は無事でしょう」

「よかった……」フェリアはそつと胸を撫で下ろした。

「それで、何故、『私』なんです？」

「それは貴女が、王室でも親 帝国 派の象徴とみなされているからです」

「別にそんなわけでは」

「ご自分をどう認識されているにせよ、貴女は王室における対 帝国 向きの『顔』として機能している」

「若い頃の留学のことを仰ってるんですか？」

「それに 帝国 皇族と婚約されていたこともよく知られてますしね」

「昔の話です」フェリアは瞳を伏せた。

「『婚約者に戦死された悲劇の王女』、でしたか まあ、プロパガ宣撫活動には使いやすいネタでしたから、 帝国 でも 王国 でも派手に報道されてましたね。私も前線の塹壕にいたとき、ラジオのニュースで聞いた覚えがあります」

無神経に言い放つ少佐の横顔を、フェリアはきつく睨みつけた。

少佐はそれを平然と無視して、語り続ける。

「その後も 帝国 との親交を象徴するイベントによく出席されていた。貴女の意志というより、王室官房が貴女をそうデザインして使ってきたということなのでしょうが、ご自分で自覚がなかったということはないでしょう」

「……………」

自覚云々より、どうでも良かったのだ。王室官房の官僚達の組んだスケジュールに従って、パーティーやイベントで笑顔を振りまき、人当たりの良いスピーチを口にする。からっぽのままの心と身体を切り離して、平然とそんな日々を過ごせる自分を不思議に思いながら、気がつけばもう何年も経ってしまっていた。そこに官僚達がど

のような意図を込めていたのかをまったく自覚していなかった、と言えばたぶんそれは嘘になる。

だがしかし、やはりどうでも良かったのだ。今度の結婚と同じように。

「何にせよ、貴女の存在は 帝国 と王室。そして勿論、王国との絆の象徴でした。その貴女が 帝国 の工作員に暗殺されれば、一時的にでも 王国 と 帝国 の関係を麻痺させることができる。」

「でもそれは一時的なものでしかないわ。王室以外にも草の根の民間レベルから国政レベルまで、 帝国 とは分厚いチャネルが存在しています。両国関係は、私が殺されたぐらいで途絶したり断絶するような薄い関係ではないわ。」

「一時的な麻痺で充分だったんです。その間に政権を奪取し、 帝国 軍を国土に引き入れる。コープ少将の狙いはそこにあった」「……？ コープ少将は反 帝国 政権を立てようとしているのでしょうか？」

何で 帝国 軍を招き入れなければならないのか？

「違います」少佐はきっぱりと否定した。

「コープ少将の目的は、 帝国 軍の侵攻を引き起こし、 王国 全土を戦場にすることです。」

ますますよく判らなくなる。

疑念というより当惑の色を強めるフェアリアに、少佐は続けた。

「コープ少将の目的は、第一に 同盟 との戦争で自分の息子達を奪った 帝国 への復讐、第二にそれを決定した 王国 政権への復讐、第三に戦場から遠く離れて平和を貪ってきた 王国 市民への復讐。徹頭徹尾、個人的な怨恨です。彼の蜂起につきあった他の連中の思惑はともあれ、彼自身は反 帝国 政権なんか立てる準備は欠片もしてませんよ。」

「そんなバカな……！」

絶句するフェリアに少佐は告げた。

「貴女が先ほど指摘したように、地政学的にこの国に反 帝国 政権なんか成立する可能性はまったくありません。そんなものが簡単に成立するなんて信じ込めるのは、対外的な接触の少ない初心うぶな親衛隊員や内務官僚くらいなものです。観念や情緒的な反発で一時的に政治を動かしても、結局は戦略環境が定める在るべき国家の形態に押し戻される そんなことは、コープ少将にも判っているはずだ。それほど知性に欠けた人物であるとは私たちも考えていない。

しかし、すべて承知であえてこんな馬鹿げた企ての首謀者に納まっているとすれば、理性がぶっ飛んで何もかも焼き尽くすつもりになってしまっているとしか思えない」

「……………」

フェリアは式典会場の警備責任者として、つい今朝ほどに顔を合わせたコープ少将の容貌を思い浮かべようとして、失敗した。周囲の状況などろくに記憶に残っていない。そこに何か破滅的な決意を抱く兆候がうかがえたにせよ、彼女には気づきようもなかった。

「この後、どうなるんです…………？」

「連中の当初の計画通りなら、貴女の死をきっかけに、王国 内の 帝国 政府施設、資産の接収や凍結。次いで 帝国 人や外交官の拘束ないしは国外追放、軍需品の輸出停止と短期間で矢継ぎ早に挑発行為をエスカレートさせ、最後の仕上げに 帝国 との領土係争地に国境警備隊を進出させる予定だそうで」

「係争地って…………何十年も前からの政府見解で、公式にとくに諦めてる土地です」

「関係ありません。国内のナショナリズムを刺激するスイッチになればそれでいい しかし、どの道、 帝国 軍側もそこまで待つ気はない。先ほど話したように、 帝国 側でも事態の収束を図らねばと焦っている連中がいる。彼等の差し金で、国境のすぐそばに侵攻部隊が集結しつつあります。」

電撃的な侵攻で一気に 王国 全土を制圧すれば解決するだろう
と思っ
ているのでしようが、話はそれほど単純じゃない。直接 帝
国 軍が国土に進攻すれば、日和見を気取っている 王国 軍も、
国土防衛に動かざる得ない。歴史的に見て、お国の入り組んだ地形
に深入りした中原の軍隊は常に痛い目を見させられています。平野部
での正規部隊との戦闘は数で押し切れても、山間部でゲリラ戦にで
も引き摺りこまれば、目も当てられないことになる。

最終的に勝てたとして、 王国 全土が蹂躪され、下手をすれば
数世紀にわたる遺恨を残しかねない。

あの 同盟 の工作員の計画でも、ここまでの事態は想定されて
いなかった。本格的な戦争状態にエスカレートする前に 帝国 側
に情報をリークして収束させるつもりだったようですが、逆に火を
つけてしまった感がある。

まあ、この手の火遊びは得てして、肝心なところで制御が効かな
くなりがちなんです。が。

しかし、避けられるものなら、避けるべきだ、というのが我々の
ボスの判断です」

「我々……？ 帝国 内部も一枚岩ではない、ということなの？」
「察しがよろしくて助かります。」

そんなわけで、火消し屋専門の我々に出番が廻ってきた、という
わけです」

そう言っ
て少佐は口許を歪ませた。

火事場を愉しんでそんな消防士をどこまで信用していいものかし
ら、と判断に迷いつつも、フェアリアは訊ねた。

「判りました。それで私は、この後、どうすればいいんですか？」
「いったん国境を越えます」少佐は頷いて言った。

「そこからあなたの生存の宣言とコープ少将の告発を、放送を通じ
て国民に訴えていただく。それを聞けば叛乱鎮圧の大義を得て、国
軍も動き出すでしょう。加えて貴女を担いで 帝国 軍が国境を越
える可能性を暗にちらつかせてもいい。元々、個人的怨恨に端を発

した無理筋の叛乱ですからね。そこから先は、決意の弱い部隊から脱落して、放っておいても叛乱部隊は自壊します」

「そんな簡単な話なのかしら」

「そんなものですよ」 憮然とした表情のフェリアに、少佐は苦笑して応えた。

「問題は、国境を越えるまでが、そう簡単ではないという点なんですけどね　ほら」

「え？」

振り返るフェリアに、少佐はバックミラーの角度を僅かにずらして示す。黒塗りのリムジンが二台、猛スピードで追い縋ってくる姿が映っていた。

「さっそくお客さんのお出ましですよ」

2 (後書き)

事件の背景説明の第2話です。

この辺、どうしても長くなりがちなんですが、我慢してお付き合いください。

ここから先、派手に飛ばしていきますので。

さて。

それで要するに<王国>ってのは、スイスみたいな国だとも理解していただければ結構です。現実のスイスも、「永世中立」をうたいながら、WWIIでは膨大な軍需物資をドイツに輸出し、金融面で第三帝国を支えてしていました。まあ、別にスイスでなくとも、大国のそばでしたたかに生きる小国の典型として捉えていただければな、と。

こういった国々との関係の中で繰り広げられる、様々なトラブルを解決するのが少佐の本来の任務です。決して口の悪いゴスロリ・サイボーグにいいように振り廻されるのが仕事ではないのです(笑)。

次回もカーチエイス。派手に行きます。

更新は来週12月11日(日)の予定です。
ではまた。

「どうするんです？」

「どうしましうかね」

「どうしましう って、あなたね！」

とぼけた口調で応える少佐に、フェリアが喰ってかかるうとしたそこへ、後方のリムジンから銃撃が開始された。

「！」

それぞれの助手席から黒いスーツ姿の男達が身を乗り出し、太いドラム・マガジン筒型弾倉を装着した短機関銃S.M.G.を発砲し始めた。派手な発砲炎マズルフラッシュを閃かせ、断続的に撃ちかけてくる。

小口径の拳銃弾が後方から車体に降り注ぎ、着弾の衝撃が車内にガンガンと響く。

「大丈夫ですよ。一応、これでも防弾仕様車ですから」

悲鳴を上げるフェリアの横で、少佐が平気な顔で指摘する。

「それにしても、警告もなしか。よくよくもって、コープ少将に嫌われてますね 何か恨みを買おうような真似でもしたんですか？」

「知りません！」

「まあ、いいでしょう。どっちにしても、少々うるさい。片づけましょう」

さらりと言つてのけると、少佐はステアリングの根元の辺りに手をつ突っ込んで、先にプラグの付いたケーブルを引っぱり出した。何を始めるのかと見ていると、今度は右腕の裾を引いて機械でできた手首を露出させ、そこにあるジャックにプラグをそのまま突っ込む。

マシーンナリイ
 機人！？

先の大戦中、急速に発達した技術のひとつに、戦傷などで喪われた四肢を機械化する機人化技術がある。当初は喪われた身体の再現に留まっていたその技術は、戦争の激化とともに、殺傷能力を高めて兵器化する方向に開発が進んだ。その一方で、これも急速に自動

化の進む戦闘車両などと人間を繋ぐインターフェイスの機能も追及され、大戦末期には有線ケーブルで戦車や装甲車と接続する機人兵マシンナリイが現れた。

出会ってからのこのかた、ぎこちない様子もまったく見せず、生身の腕と同じように自然に動いていたので気付かなかったが、少なくともこの妙な軍人の右腕は機械でできていたらしい。

しかし、その右腕にケーブルを繋いで、何をしようと……？

啞然として眺めるフェリアは、次の瞬間、後部シートの更に向こうから聴こえてきた腹に響く轟音にさらに驚いた。慌てて振り返ると、二台のリムジンの内、先行する一台のフロントノーズから運転席までにかけてが、獣にでも喰いつかれたように穴だらけにされていた。ぐらりとスピンしたそのリムジンは後続の車輛を巻き込み、そのままカーブの後ろに消え　爆轟とともに赤黒い爆炎が吹きあがり、視界から流れ去る。

「今のは……？」

「後部トラックに機銃を仕込んでおいたんですよ」
こともなげに少佐が告げる。

「……まるで軍事探偵物の映画みたいだわ」
「本職ですから」

「大人が観るものじゃないって意味です！」

「世の中、案外、子供の想像力以下の出来事でできたりするものですよ」

「……勉強になった、とは言いたくありません」

「なるほど」少佐は頷くと、ケーブルを繋いだままの右手で前方を指差した。

「ならば、次の授業です」

つられて前を見れば、今後は黒塗りの四角いバスのような箱形の車輛が、道路の真ん中の車線に陣取って前方を塞いでいる。

「親衛隊の装甲車輛です。さっきのリムジンの相手をしている間に、バイパスから先廻りされたらしい」

王都 での暴徒鎮圧も任務とする親衛隊の装甲車は、複数台撃いで駐車すればそのまま壁となつて道路を封鎖できるようなつてゐる。それ故に直方体で構成された車体形状をしているのだと、その昔に参加した式典でコープ少将みずから説明を受けたことをフェリアはぼんやりと思い出していた。

その間も徐々に速度を落とした装甲車は、フェリア達の乗るスポーツカーとの距離を詰めにかかる。

少佐がステアリングを振つて、装甲車の脇を擦り抜けようと試みる。だが、装甲車の運転手は器用に車体を操つて、その隙を与えようとしない。

やがて、装甲車の車体後方の扉が観音開きに開け放たれた。そこには大口径の動力機銃を据えた銃座が設けられ、下を向いていた長い銃身が鎌首を上げる。

「……ねえ、この車の防弾性能つて」

「あー、さすがにあの口径の機銃には通用しませんね」

少佐がのんきに応えるそばから、動力機銃の銃口が火を吹いた。発射速度があまりに早い所為か、工業用の電動モーターが全力稼働するような唸りを上げ、機銃弾が路上にぶち撒けられる。少佐が巧みにステアリングを捌いて銃撃を避けようとするものの、何発かが車体を掠め、その度に激しい打撃音とともに車体が大きく揺さぶられる。

衝撃でフロントガラスが砕け、目の前が破碎されたガラスで真っ白になる。即座に少佐が左腕を突っ込んで左右に振り、前方の視界を確保した。激しい強風とともにガラスの破片が車内に舞い込み、フェリアは鳥打帽キャスケットを掴んで頭を下げると、悲鳴を上げて叫んだ。

「何か反撃できないの!？」

「エンジンルームに機銃を積むスペースがなかったもので!」

とぼけた返事を怒鳴り返してくる少佐に、半ば絶叫するように命ずる。

「何でもいいから、何とかして!」

「了解　では、しっかりとシートに掴まっててください！」

「え　？」

何をする気なのか　と訊ねるより先に、不意に横から身体ごと持っついていかれるような加重に襲われ、ドアに強く押し付けられた。

それが車体ごとその場でスピンしているのだ、と気づいた時には、後方のトランクルームから先ほどと同じ轟音　機銃が発砲している！？

直後に再度ドアに押し付けられてもう一度スピン　我に還った時には、再び車体の位置は元の進行方向正面を向いていた。ただし、前方の装甲車の銃座はあらぬ方向を向き、銃座のそばにいた黒い制服の親衛隊員がひとり、路上に転がり落ちようとしていた。

あ……え……何が起こったの……？

まさか、この速度で走りながら、その場で旋回して後方の機銃で銃撃を加え、さらに旋回してまた正面を向いた、と。そういうことなのか？　たった二車線しかないこんな狭い道幅の道路で。カーブの多い曲がりくねったこんな道で。一歩間違えば、目も当てられない大事故に

今更ながらに恐怖感が全身を襲い、血の気を喪って震えるフェリアに少佐は鋭く告げた。

「加速します」

フェリアの返事を待たずにアクセルを床まで踏み込む。前方から蹴飛ばされたように身体がシートに押し付けられる。カリカリにチーンナツプされた8気筒水冷エンジンが咆哮を放ち、防弾装甲と後部機銃で重くなった車体を強引に前へと弾き飛ばす。フロントグラスも砕け散り、車体のあちこちを穴だらけにされたスポーツカーは、既に本来の流麗なフォルムを喪い、空力的には残骸と言いつてもいい有様にまで成り下がっている。だが、それでも己の出自への誇りを懸けるかのような力づくの加速性能を絞り出し、車体を前へと押し込もうとする。エンジンだけでなく、車体全体で傷ついた野獣のような叫びを放つその車体を御して、少佐は前方の装甲車の

右脇に空いたわずかなラインへと突っ込んだ。

その動きに気付いた装甲車の運転手が、車体を崖側に寄せてスポーツカーを挟みこもうとする。

怯まずアクセルを踏み込んで装甲車の運転席のそばまでくると、

少佐はリアウインドウを開け、フェリアに叫んだ。

「ハンドルを頼みます！」

「え？」

その声に振り返れば、少佐はステアリングを手放して窓から身体を乗り出そうとしていた。

「ちよつと！ 何を！？」

慌ててステアリングを掴んで声を上げるフェリアの前で、少佐はその機械の右手を装甲車のドアにびたりと当てた。

気づいた助手席の親衛隊員が慌てて短機関銃S.M.Gを構えようとするその姿に、

「遅い」

と一言だけ告げると、右腕に内蔵された超振動発振器のジャイロモーターを発動させる。重く弾かれるような音ともに、装甲車の助手席のドアが大きくへこみ、背後の親衛隊員もろとも内側に吹っ飛んで、さらには運転席の隊員まで捲き込んだ。

急に車体をふらつかせ始めた装甲車をよそに、少佐はフェリアからステアリングを取り戻すと、アクセルを踏みこんでそのまま装甲車を抜き去った。

その後方では、運転手を喪った装甲車が、カーブを曲がれずにガードレールを突き破り、河面に飛び込んでゆく。

「……終わったの？」

「いえ、もうひと幕」恐る恐る顔をあげるフェリアに、少佐は軽く顎をしゃくった。

「今度は空からのお相手です」

ぼろぼろのスポーツカーと並走するように至近距離を飛ぶジャイロ機の姿に、フェリアはそのまま気を失いかけた。

機体頭上の回転翼ローターによって揚力を得て飛行するジャイロ機は、これも大戦中に実用化されたもののひとつである。飛行機のように長大な滑走路を必要としない垂直離着陸性、地上すれすれの高度で自在に上昇と降下を繰り返す高い機動性を持つジャイロ機は、対地攻撃や小規模の兵力投入を目的とする戦術航空ユニットとして理想的な存在で、帝国 と 同盟 とを問わず、戦場で急速に普及していった。

戦後、軍での需要は大幅に縮小したが、各メーカーが装甲を外して速度と航続距離を増した民生用機を安く販売し始めたことで、治安機関など後方の公的機関向けへの普及も広がった。

もつとも、「安く」とはいつても、車輛などとは桁が違う金額だし、燃料代やパイロットの人件費、機材メンテナンスといった運用経費まで含めたランニングコストとして一機当たり毎年民家が一軒買えるくらいの費用が飛んでゆくので、まだまだ予算の潤沢な自治体や組織しか導入できていない。

それでもさすがに金余りの 王国 だけに、国内治安を主任務とする親衛隊にもまとまった数のジャイロ機が導入されていた。

今、フェリアの眼前に浮かんでいるジャイロ機もそのうちの一枚で、機体の尾部には親衛隊のマークがはっきりと見て取れる。任務の性格から見ても対空砲火への備えなど必要ないので、余分な装甲は設計段階から既にはぶかれており、輸送能力と空力性能を優先した丸みのあるフォルムをしている。こんな時でさえなかったら、フェリアも可愛いらしいとさえ感じたかもしれないデザインの機体だった。

その後部、貨客室カーゴルームの側面ドアが開け放たれ、据え付けられた動力機銃の銃座に親衛隊員が取りついて、こちらに銃口を向けていた。

「どうするの!?!」

「さすがにトランクの機銃で撃ち落とすのは無理がありますね」

他人事のように語る少佐に、フェリアは思わず声を荒げて怒鳴った。

「何で、そんなに落ち着いてられるんです、貴方は!？」

「騒いだからって、どうなるものでもありませんから」

平然と言つてのけたその直後、ジャイロ機の銃座が発砲を開始。

フェリア達の乗るスポーツカーの周囲に着弾し始める。

再び頭の鳥打帽キャスケットを掴んで、悲鳴を上げるフェリアをよそに、

「やれやれ」と呟いて少佐はステアリングを力強く左右に振る。

蛇行しつつ、それでもスピードを落とさずに、スポーツカーは器用に次々にカーブをクリアしてゆく。驚くべきドライビング・テクニクというべきだったが、ジャイロ機も付かず離れずに追隨する。河面すれすれの高度、河岸の岸壁そばという位置取りを考えると、こちらのパイロットの度胸と技量もなかなかのものだった。

だが、穴だらけのスポーツカーとジャイロ機では、はじめから勝負にならない。身を隠せるトンネルのようなものも当座、すぐには辿りつけそうにない。

このままでは、すぐにジャイロ機の火線に絡め取られ、今度こそ蜂の巣にされかねない。

これは、さすがにもう駄目なのかしら　と、フェリアが覚悟しかけたとき、

「そろそろ片付きます」

「え?」

驚いて顔を上げたその目の前で、ガラス張りのジャイロ機の操縦コックピット席が一瞬で白く曇った。次いで機体上部の回転シャフトと後部のエンジンに火花が散り、すぐに小さな炎を吹き出す。

ぐらりと揺れて河岸より離れたジャイロ機は、そのまま急にバランスを崩して転倒。身を擦って転がり込むように河面に飛び込んで爆発した。

少佐はにやりと笑うと、窓から左腕を突き出して軽く振る。

「何?」

「私の部下です。この辺りで親衛隊のジャイロ機に追いつかれるだろうと思ひ、あらかじめ待機させていました」

振り返れば、後方の崖の上に大柄な男が物干し竿のような長い銃身の機銃のようなものを片手に立っている姿が、遠目に一瞬だけ見えた。

だから、少佐は落ち着いてられた　いやいや、そんな読み、いくらでも外れる要素はあった。ジャイロ機が一機でなく二機でこられたらそれで状況は一変していたろうし、この車がここまでの銃撃に耐えきれずに潰れていたことだってあり得る。

どうとでも転がりかねない危うい状況で、それでも抜け抜けとすべて自分の計画通りに事が運ぶとのんきに構えていられたこの男の神経はどうなっているのか？

いや、それを言えば、さっきの運転もそうだ。こんな狭い道幅の路上で、高速走行する車輛をその場で一回転させるなど、正気の沙汰ではない。失敗するとは微塵にも思わなかったのか、この男は。

それを「必要だ」と判断するや遂巡なく即座に実行に移る決断力それは胆力とか勇氣とかの有無といった問題ではなく、何かしらの狂気に近いもののようにフェリアには感じられた。

果たして、このままこの男についていいものなのかどうか……？

いや。それを拒絶する選択肢がないことこそ、この場での最大の問題なのだ。

今更ながらフェリアは頭を抱え、暗澹たる気分でフロントガラスをなくしてただの空枠と化した前方へと目をやった。

そこでは、低く垂れこめた灰色の空から、白く小さな雪の欠片が舞い始めていた。

3 (後書き)

スポーツカーで逃げる少佐とフェリア王女を追って、次々と親衛隊の追撃部隊が襲いかかるお話。

実はこのお話を思いついたファーストイメージは『007 慰めの報酬』冒頭でのカーチェイスだったりします。ですので、少佐達の乗るスポーツカーはアストンマーチンのイメージでひとつ。

いろいろ無茶なんですけど、まあ、それだけに少佐の無茶っつーか、ぶっ壊れ具合もここで明らかになるエピソードでもあります。

恐怖感や危機感がまったくないわけではないのでしようけど、バランスの置き所が常人とまったく違うのでしようね。

今回はそのあとに続く冬の山中の追撃戦に備えて、敵味方、準備を整えるお話。

更新は来週12月18日(日)の予定です。

ではまた。

『そろそろです』

パイロット

ジャイロ機の操縦手が、機内通話用のヘッドセット越しに告げる。シラン大尉は無言で頷いて、操縦席の後ろから前方を見た。

粉雪の混じり始めた河面すれすれの高度を飛行するジャイロ機の進路の先には、河岸に設けられた国境警備隊の基地施設が見えてきた。いくつかの兵舎が寄り集まり、河岸にはボートを停泊させたはしけのようなものもある。

ほどなく上空に達したジャイロ機は、教練用の営庭グランドの脇にある着陸ポートの上をいったん通過し、それからゆっくりと降下を始めた。「着陸はしなくていい。地表すれすれまで近づけてくれれば、そこで飛び降りる。私を降ろしたらそのまま基地に帰投しろ」

プレストーク・スイッチ

送信ボタンを押さえながらそう言い終えると、ヘッドセットを外

サーベル

カーゴルーム

し、機内に立てかけていた軍刀を掴んで貨客室側面ドアを開け放つ。激しい気流が流れ込み、軍用マントの裾がばたばたと音を立てて翻る。回転翼ローターによって生じる下方気流ダウン・ウォッシュが地面に跳ね返ったものだろう。気にせず、大尉は機外に身を投じる。

地上まではまだ多少の高度はあったものの、特に足を傷めることもなく着地した大尉の下へ、数人の国境警備隊隊員達が駆け寄ってきた。山中での活動を任務とする山岳部隊だけあって、いずれも屈強な体躯をした大柄な男達だった。

無事着地した大尉の様子を見届けると、ジャイロ機は上昇を開始し、すぐに河面の彼方へ去っていった。

「ようこそ、大尉」若い士官が片手を差し出す。

「国境警備隊第119山岳警備連隊のケイス・ホルト中尉です」

一旦、何かを見定めるようにその手を冷たい視線で眺めてから、大尉は中尉の手を握った。

「……王室親衛隊のエダ・シラン大尉だ」

「兵舎の方に温かい飲み物を用意してあります。そこで概要説明を

フリーフィンゲ

「いや、不要だ。時間が惜しい」大尉は首を振った。

「ここで済まそう」

「判りました」

頷く中尉に、大尉は単刀直入に訊ねた。

「君は今度の任務の性格をどこまで理解している？」

「今度の決起には当初から参加しています」

「彼等は？」

背後に控える部下たちに目をやり訊ねる大尉に、中尉は胸を張って応えた。

「部隊の下士官達です。彼等も、同士として決起の趣旨に賛同する者たちです」

「兵は？」

「彼等には何も告げていません。しかし、こういう状況下で信頼が置ける人間を中心に少数精鋭で選びました」

「結構だ」大尉は頷き、続けた。

「フェリア王女と 帝国 の工作員のその後の足取りを知りたい」

「クトラ口近くで国道を下りてからは足取りを見失っています。地元の警察も警戒線を張っていますが、捕捉できていません」

「何故だ？」

「この辺は地元の農家が勝手に作った私道が入り組んでるんです。ほとんど舗装はされてませんが、人だけでなく車が通れる道も珍しくない。地元の警察官でも迷うくらいで、一度、そこに入りこまれると、大規模な山狩りでもしない限り簡単には見つけれません」
大尉は小さく舌打ちし、先を促した。

「それで、連中の行先に心当たりは？」

「国境を越えるのなら、装備を揃える必要があります。麓の街で今から登山装備を購入するとは考えにくい以上、おそらく山中の山小屋か何かに登山装備を事前集積しているものと考えられます。しか

し、地元住民の目があるスキー場近くや一般登山道、わいわれ国境警備隊の警戒線の近くにある小屋は避けるはずです。

それに女の足で国境を越えられるルートも限定されますから、連中が利用できる小屋の数はさらに限られてきます」

頷く大尉の前に地図を広げ、中尉は続けた。

「最終的に利用が想定される山小屋は、こちらに印を付けた五つです」

「……………」

大尉は無言で地図を睨みつけた。

いくら地図に載っていない私道が縦横に走っているとはいえ、民家の少ない奥地まで車の走れる道が通っているとは考えにくい。何の装備もない状態で、女連れで山中を長歩きするとも思えないから、奥地の方にある二軒の山小屋は無視していい。

残る三つの内、ひとつは三方を勾配のきつい丘に囲まれていて見通しが利かない。発見されにくい代わりに、追撃部隊に接近されても気付かない懼れがある。おそもうひとつは、背後に急な崖を背負っていて、ここからロープで降下して襲われたらどうにもならない。

となると、最後に残った麓により近い、なだらかな丘の上にある山小屋が一番怪しい。長期間潜伏するならともかく、装備を整えるだけならこのくらい見晴らしがいい方がいい。周囲の地形からして私道が近くまで通っている可能性も高かった。

「この小屋までどれくらいで行ける？」

「今から出発するのでしたら、三時間もあれば」

「遅い！」鋭く叱責するように大尉は言った。

「ジャイロ機で強襲を掛けられないのか？」

「無理です」中尉は首を振った。

「天候が崩れ始めてます。ただでさえ山間部の空気の流れは急に変わって危険なんです。山頂から吹き下ろす強風に巻き込まれたら、一発で叩き落される」

「三時間もあれば、国境を越えられてしまうぞ」

「まさか」中尉は肩をすくめた。

「そこから国境線までは、大人の男の足でも半日は掛かります。

帝国 側の人家まではさらにもう半日掛かる。途中で夜になるし、天候も悪化してる。女連れの足で、そんな無茶は」

「フェリア王女は、乗馬と山歩きが趣味で基礎体力は申し分ない」
大尉は冷やかに指摘した。

「同行している男は、帝国 の軍人で、こういった過酷な環境での生き残りサバイバルと戦闘行動を得意とする専門家だ。プロフェッショナルそして、自分が武装した戦闘集団に追撃を受けていることを充分に理解している。多少のリスクと引き換えに時間を稼げるなら、躊躇ためらわず時間を得る方を選ぶだろう」

「……判りました。しかし、やはりジャイロ機は出せません。代わりに、近くで演習中の部隊がいますから彼等を向かわせましょう」

「演習中の部隊……？」

「山岳戦車一輜と歩兵一箇小隊からなる、山岳混成小隊です。実弾も持って出てます。彼等に連中の頭を押さえさせ、その間に後方から我々が追いつく これでどうです？」

「……いいだろう」

大尉が頷くのを受け、中尉は背後の部下たちを振り返って指示を發した。

「よし！ 五分で出立する。総員、急げ！」

「いい景色だわ」

やっとの思いで辿り着いた山小屋の二階、ベットの窓を開け放ち、一面の雪景色に彩られた山々を前にフェリアは感慨深く呟いた。

「自分が逃亡者だということも忘れそう」

「忘れてもらっては困ります」どすん、と床に巨大な背負い式のザックを置いて、少佐が釘を刺す。

「これからが本番なんですから」

「……できれば幕が上がる前に降板したいのだけど」

「生憎、今から主演女優の代わりに見つけるのは無理です」

「なら、せめて相手役を変えてちょうだい」

「次の公演の際には考えましょう」

フェリアの嫌みを軽くかわしながら、少佐はザックから取り出した白いダウンジャケットを取り出し、そばのベットのの上に置いた。

「他にも、このザックの中に着替えと装備一式を入れておきました。着替えたらリビングまで降りて来て下さい」

そう言っさつさと部屋から出て行ってしまう。

フェリアは溜息をひとつついて、服を着替え始めた。

手早く着替えを終え、階下のリビングに下りてくると、同じく着替えを済ませた少佐が、くわえ煙草で大きな箱型の無線機を耳に当て、誰かと話をしていた。

そう言えば、いつの間にか眼鏡を外している。やっぱり伊達眼鏡だったのか、あれは。

そんなことを考えながら、聞くとともになしに、通話の内容に聞き耳を立てる。

「そつだ、軍曹。王女は無事だ。装備もすべて回収した。準備が整い次第、すぐにここを出る」

この時間から山中を歩いて国境を越えるつもりだろうか。時刻はすでに午後を廻って久しい。外はまだ明るい、山の日没は早い。行程の半分以上は夜になるだろう。あえてそんな危険を ああ、たぶんやるに違いない、この男なら、とフェリアはげっそりとした気分に陥った。

「いや、それは想定内だ。ルートは変更しない。状況ケース3の仕掛けを使う。代わりに迎えの方を前進させる。構わん、將軍オヤジには後で俺が話を付ける」

そこで一旦、無線機から顔を離し、フェリアに声をかけた。

「そちらのキッチンにコーヒーが沸いてます」

「珍しく気が利いてるのね」

「飲むのは道中です。携帯用の保温瓶もテーブルの上に置いてますから、コーヒーを入れてこちらに持ってきてください」

「……………」

一国の王女を捕まえて召使扱いか、と力チンときたが、再び無線機の相手に戻ってしまった少佐に何を言っても無駄なような気がして、諦めてキッチンへと向かう。

コーヒーを入れた保温瓶をふたつ手にしてリビングに戻ってくる
と、無線機との通話を終えた少佐が、今度はソファアに腰掛けて自動小銃を組み立てていた。

「誰と話してたんですか？」

「部下です。ついさつき、アンチマテリアルライフル対物狙撃銃でジャイロ機を撃ち落とした男です。貴女も先ほど会ってるはずですよ」

崖の上にいるのを遠目で一瞬だけ目にしたのを「会った」というなら、あの大男のことだろうか。

「ここに用意してあった登山道具一式も、彼に用意させたものです
どうですか、着心地は？」

「……………悪くないわ」

ハイネックのアンダーウェアにインナージャケット、ダウンジャケットとこれだけ分厚く着込んでも身体の動きに違和感がないのは、よほどそれぞれのデザインがしっかりしているからだろう。それについて、体温も十分に保護されている感覚がある。長居するつもりがないこともあってか、暖炉にも火はついてなかったが、寒さはまったく感じない。メーカーのタグはすべて剥ぎ取られていたが、帝国製にせよ 王国製にせよ、いずれ名にし負うメーカーの最高級品だと思われた。

「良かった」不意に柔らかな表情で少佐は笑った。

「後で顔を合わせると思います。その時、本人にも直接言ってやっ

て下さい」

「……………」

フェリアは奇妙な違和感を覚え、当惑した。危地にあっても常に飄々とした態度を崩さず、冷やかに辛辣で皮肉な台詞ばかり吐き続けている少佐の印象と、唐突に見せられたこの人間臭い表情がフェリアの中でうまく整合せず、妙にどぎまぎしてしまう。

「どうかしましたか？」

「べ、別に何でもありません！」言って、逆に訊ねる。

「それより、本当にこれからすぐに出発するんですか？」

「勿論です」

「すぐに夜になってしまっわ」

「知ってます」

「天気も崩れ始めてます」

「そのようですね」

「危険です」

「このままここにいれば、すぐに敵に踏み込まれます。その危険よりはましです」

ああ、そうくると思った 想定通りの問答でやりこめられる自分に釈然とせず、なおも喰い下がる。

「私はオンシーズンの山歩きトレッキングしか経験がありません。冬山登山はおろか、本格登山の経験さえないのよ」

「そう伺ってます」

「救助を呼べる立場でもなし、足を滑らせて滑落事故でも起こせばそれで終わり 自殺行為だわ」

「そのために私がいいます」

静かな口調で少佐が断言した。

「……………それを信じると？」

「すべてそれが前提となります。今の貴女に、それ以外の選択肢はありません」

「……………」

なんて傲慢な男なのだろう、と啞然とするフェアリアをよそに、少
佐が立ち上がって宣言する。

「では参りましょう、王女殿下。何、大丈夫。神の祝福を受けた花
嫁とともに、神々の懐深き山々へと向かうんですから」

……その花嫁の結婚式をぶち壊したのは、どこの誰だ？

4 (後書き)

更新が遅くなり申し訳ありません。

第4話、敵味方、それぞれが追撃と逃走の準備を整える回です。

今回、繋ぎの回なのであまり語れるネタが少ないんですけど、それでもひとつふたつほど。

まず、親衛隊のシラン大尉が地図を見ながら、少佐とフェリアの潜む山小屋に当たりをつけるシーンがありますが、軍用地図上の等高線とか植生などの情報を基に分析したものと思われれます。こういう地図を読む技術というのは軍人にとって重要な技術^{スキル}です。

自分の作品の場合、軍人を描く場合、なるべくこういう「技術者としての側面」を拾ってゆこうとは意識しているので、これもその一環の描写となります。

それとその山小屋について。

要するに、ここにあらかじめ登山装備とか武器なんかを運び込んでおいたものを使っているわけなんです。別に軍曹がひとりでもかも用意したわけではなく、少佐の指揮下にある6課の作戦チームによって揃えられたものです。

大人数がちよこまかと動いているのを描写しだすと話が長くなるのでばっさりカットしましたが、こうした装備品を調達する人とか、親衛隊や国境警備隊の動きを監視している人とか、<王都>に残ってスタッフ間の連絡を担当する人とか、そうした裏方の人たちの活動が背景にあって初めて少佐達の活躍が成立しているのです。

……というより、作戦の統括責任者だというのに、何で少佐が一番派手な立ち廻りやってるんだというそもそもの話もあるんですが、その辺は本人の趣味だとか(爆)。

今回は第5回&第6回の2話同時公開で、少佐vs第1山岳混成小隊の激突編。

山岳戦車を擁する機動歩兵小隊を相手に、少佐がたったひとりで如何なる死闘を繰り広げるのか？

更新は来週12月25日(日)の予定です。
ではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1130z/>

棺のクロエ1.5 花嫁強奪

2011年12月19日00時52分発行